

人と動物の共生を創造する都市環境についての一考察 —共生のユニヴァーサル・デザインの視点から—

松原未央子・宮崎正勝
北海道教育大学釧路校社会科教育学研究室

A study of urban environmental amenity to create symbiosis of human beings and animals:

From the point of view of universal designs of symbiosis

Mioko MATSUBARA and Masakatsu MIYAZAKI
Hokkaido University of Education, Kushiro085-8580, Japan

Summary

These days, we live in "century of symbiosis." We discussed about urban environmental amenity for not only human beings but also animals. And so, from the point of view of environmental education, we studied the issue of "slaughter of house pet." In addition, we showed some urban environmental amenity for symbiosis of human beings and house pets (universal designs of symbiosis).

はじめに

「共生の世紀」であるといわれている現在。地球環境の悪化が叫ばれて久しいが、人間が動物や自然といった他の生命を尊重し、共生していくためには、人間だけでなく、他の生命にとっても生きやすい、住みやすい都市環境の在り方（本稿では、それを「共生のユニヴァーサル・デザイン」とする）が問われるだろう。しかしながら、開発を前提として成長を遂げてきた「現代社会」と「共生」は、対立の関係にある。従来の開発優先の発想を変えずに更なる開発を積み重ねながら、「共生」への道を模索することは、極めて困難であろう。

開発と共生の対立関係を具現化して認識し、都市環境の在り方を問うためには、感性と全体像を見通すことのできる社会的なセンスの育成が欠かせない。そのためには、文字を媒体とした記号による知識の集積ではなく、自然や動物に触れ、子どもたちの感性に訴えかけるような「生きた知識」が求められると考える。

上記のような観点から、子どもにとって最も身近であり、かつ人間社会において最も弱者の存在であるペット動物に注目し、取り上げる。また、ペット動物は、その愛らしい容姿から子どもの感性を刺激する存在であると同時に、

現代社会においては、「生きているモノ」と「殺処分」という生命の關の部分秘めている存在でもある。ペット動物を通して、現実の社会の在り様と人間の姿を垣間見ることができるのである。

まず、ペット動物の社会的立場について考察する。次に、捨てられたペットたちの最期の場所であると同時に、動物愛護活動の普及啓蒙の場でもある動物管理施設で、明日にも処分を受ける運命にあるペットたちやこれらの現実と向き合う人々と出会い、そこから見えてきたものを含め、取材報告をする。さらに、日本と欧米の「共生」への取り組みを参考に、人と動物の共生の都市環境の在り方について述べる。

1. ペットと呼ばれる動物たち

ペットと呼ばれる動物たちは、野生と家畜の区別がつかない稀な動物である。ある時は可愛いと思い、ある時はうるさいと感じる。人間にとってこれほど身近で、矛盾に満ちた存在はいないのではないだろうか。「どうやって付き合い合えばよいか分からない」という人々の思いが、ペット・ロスと殺処分という極端な現実を生み出していると考えられる。

ペット動物は、大辞林によると、「飼って可愛がっている動物。愛玩動物。」¹として定義されているが、近年ではコンパニオン・アニマル（伴侶動物）という、一方的に可愛がる対象としてではなく、人間と生活を共にする仲間として位置づけられるようになってきている。ペット産業一兆円市場ともいわれる空前のペットブームである現在。その華やかなペットブームの陰で、年間約50万頭もの命が捨てられ、殺処分されているのである。

(1) ペットブーム

空前のペットブームといわれている現在。2004年に発表された飼育頭数調査（ペットフード工業会）によると、2003年の全国における犬の飼育頭数は1114万頭（飼育率18.3%）で、猫は808万7千匹（飼育率12.4%）という結果が報告された。²また、総理府の「動物愛護に関する世論調査」（2003年7月調査）によると、約7割の人々がペットを飼うのが「好き」と答えている。ペット飼育がよいと思う理由については、「生活に潤いや安らぎが生まれる」を挙げた者の割合が54.6%と最も高く、前回の調査と比較すると、4%ほど上昇しており、ペットに癒しを求めている人が急増していることがデータからもみとれる。³

現在のペットブームの最大の特徴は、飼い主とペットとの関係であるといえるだろう。これまでの愛玩動物として役割から、人生の伴侶、家族の一員という性質が強まり、生活に欠かすことのできない存在にまでなりつつある。このような変化は、昔は家の外で「飼う」というのが当たり前だった光景としてよく見られたのだが、現在では座敷犬・座敷猫といった家の中で共に「暮らす」という表現が用いられ、「飼う」「餌をやる」といった表現に違和感を覚える人が多いことから明らかである。

最近では、某消費者金融のCMに出演するチワワの人気は凄まじいものがある。また、アメリカで大旋風を巻き起こした最新ディズニー映画の「ファインディング・ニモ」の影響により、沖縄で熱帯魚のクマノミが乱獲されているという報告もなされている。

日本という国は、流行の移り変わりが激しいといわれるが、特に近年のこれらのブームに共通していえることは、メディアによるところが大きいということである。近年は、世界中の情報が瞬時に流れる情報化時代であるため、メディアによる情報が人の意識を左右するほどの力を持っているとさえいわれる。メディアは、ペットの可愛らしさや愛らしさを強調する。そのようなメディアが提供する情報は一人歩きし、その結果、人に安易な意識を持たせ爆発的なペットブームを巻き起こすのではないかと考える。

「ペットブーム」という言葉には、あたかも動物好きが

増え、愛され、可愛がられているようなイメージがある。しかしながら、そのブームが去ったあと、必ずといっていいほど、捨てられ、収容施設の中でひしめき合っている彼らがいる。ブームからはじかれたペットたちの行き着く場、それは、「処分」という言葉で片付けられる「死」なのである。

(2) 生きているモノ～ペット産業と法～

一兆円市場とも言われ、ますます加速化傾向にあるペット産業。ペットショップ、動物病院、トレーニング（しつけ）教室のみならず、ペット共同型マンション、テーマパーク、ペットホテル、ペットシッター（留守中の世話を引き受ける）、美容院、ペット探偵（行方不明のペット捜索）、ペット貯金、ペット保険、ペット霊園等...あらゆる分野がペットとその飼い主を対象とした事業を展開している。

ペットショップのケージに入れられた子犬や子猫たち。彼らがどこからやってくるのかというと、たいていの場合はブリーダー（繁殖家）からである。ブリーダーとは、特定の動物に愛情を注ぎ、誇りを持って、よりスタンダード⁴に近い本来あるべき姿をつくらうとする人々を指す。しかしながら、日本においては、欧米と違いブリーディングに規制も制限もないため、かなり乱暴なビジネスを展開する人々が横行しているという。

彼らは、「生産者」と呼ばれ、製造工場と呼ばれる悲惨な環境に動物を閉じ込め、体力が続く限り交配を繰り返し、その子どもを売る。もしくは、市場へ卸す。

日本最大のペットオークション「ペッツデコレーション」では、全国各地のブリーダーが競りにかける犬猫を連れて、また、各地のペットショップの店長たちは札束を抱えてやってくるという。一頭の落札には平均20秒。かごの中の子犬や子猫がめまぐるしく入れ替わり、一回3～4時間のオークションで350～400頭が競り落とされる。一日およそ2000万円のお金が動くという。競り落とされた動物たちは、そのまま荷物みたいに移送されてゆく。そして、ペットショップのケージの中で、ひたすら新たな飼い主を待ち続けるのである。⁵

劣悪な環境におかれて育った生体には、伝染病や寄生虫、皮膚病を患っている者もいる。中には命を落としたり、何らかの病気に感染した潜伏期間の状態で売られていくものもいる。チェーン展開している大型ペットショップ等では店頭へのケージに入る前の動物たちが、こうした不当な扱いが原因で、毎月数十頭も死んでいるという。また、繰り返される大量生産は、結果として先天性疾患や質の低いペットをつくることにもなった。実際に、犬猫は推定で年間約15万頭生産されているとのことであるが、そのう

ちの約 5 万頭は病死等の理由により流通していないと考えられている。⁶

飽きたから、吠えるから、臭いから...といった理由で、簡単に捨てられるペットたち。捨てる人が多いのは、簡単に手に入るシステムが安易に成立しているということを示している。新しい商品（生体）が次々と生み出されてしまう消費社会において、ペットはもはやモノであり商品でしかない。

華やかで巨大なペット産業。それは、私たち人間の飽くなき欲望によって成立し、その裏で、膨大な数の命が使い捨てられ、犠牲になっているのである。

また、現行の法律では、ペット動物は、「器物」として扱われる。法律上、生きていたペットも、ぬいぐるみも、電子ペットの AIBO も、モノであることに変わりはないのとされるのである。しかし、ペット動物には命があり、生きています。明らかに命のないモノとは異なっています。

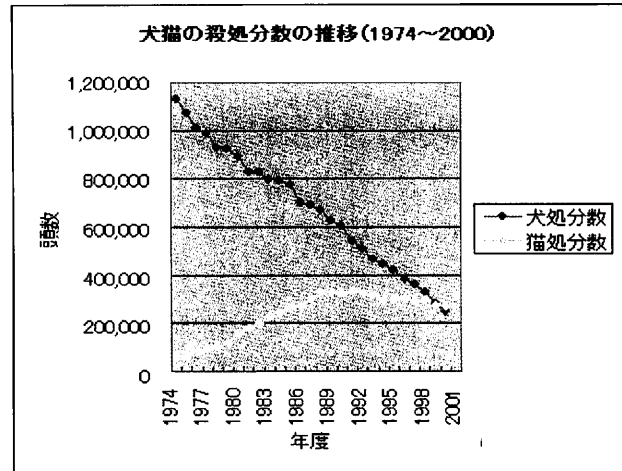
ペット動物は命ある存在だが、その一方で、ペットショップやブリーダーが動物を売買する。これは、商品でありモノである。一方では命、もう一方ではモノという矛盾をペット動物は秘めているのである。これは、動物が置かれている社会的な立場、つまり、扱う人間によってその価値が変わるということの意味する。

（3）生命の明暗～ペット・ロスと殺処分～

家族の一員として、人生の伴侶として愛情を注がれるペットたち。その一方で、捨てられ、殺処分されるペットたち。私たち人間のペットに対する意識は、このような極端な現実を生み出してしまっている。

「ペット・ロス」とは、直訳すると「愛玩動物の死」であるが、ペットの死または離別によって日常生活に支障をきたすほど落ち込んだり、体の不調を訴えるといった症状を引き起こす悲しみや痛みの過程を表現している。先立たれることを承知で、ペットとの生活を始めるにも関わらず、これほどまでにペットの死が人の心を傷つけるのは、不透明な人間関係になってしまった現代だからこそ起こりえた現象ではないか。そして、ペットという存在が飼い主にとって、なくてはならない存在になっていることを意味している。しかしながら、大切な存在を失った痛みこそが気持ちの本物であった証でもある。ペット・ロスとは、人間が生み出してしまった極端な生命の「明」でもあり、ある意味ではペット動物にとっては幸せであるといえる。彼らは、死後も愛されるからである。

しかし、その裏側で、犬猫に限れば、年間 50 万頭ものペットたちが闇の中へ葬り去られている。一日にして約 1500 頭以上もの割合で犬猫たちは殺処分されているのである。



犬猫の殺処分数の推移 (1974～2000)⁷

大半がイメージする「安楽死」処分。実際は、炭酸ガスによる窒息死であり、苦痛を伴う死であるといわれている。炭酸ガスが使用される理由は、安価で一度に大量に処分されるからである。

施設に収容された動物たちの収容期限は、施設ごとに異なっているが、たいてい 3～7 日間、収容されたその日に処分されるというところもあるらしい。

処分は、一般的に次のような手順で行われる。

犬舎には、いくつか区切られた部屋があり、犬たちは、一日ごとに順繰りに隣の部屋へと移動させられる。最後の部屋の壁の向こう側にあるもの。それは、殺処分するための処分室である。そこには、処分機と焼却炉が設置されている。収容期限内に飼い主か里親希望者が現れない限り、そこにいる動物たちは、殺される運命にある。生きて再びここを出る確率は 1～2% しかないという。

最後の扉が開き、犬たちは幅 1m、長さ 10m 程の廊下に追い込まれる。犬舎の入り口側の鉄柵と廊下の奥側の鉄柵がスライドして徐々に迫り、必然的に処分機に追い込まれるようになっていく。追い込まれた先には、真っ暗な穴が開いている。そして、その穴、つまり処分機の中へ落とされる仕組みになっている。落とされた時点で、骨を折るものや、気絶するものもいるという。また、廊下から処分機へ移動する際、必死で穴に落ちないように、肢を踏ん張る犬がいる。だから、その穴の周りには鉄板が敷き詰められ、水を流して滑りやすくしているという。皮肉にも、殺すための工程には、こうした効率のよいシステムが出来上がってしまっている。

処分機は、縦 1m 半、横 1m、高さ 1m 程の暗くて狭い

箱型になっている。「眠るがごとく」の意味から、この処分機を「ドリーム・ボックス（正式名：炭酸ガスドリーム装置）」と呼ぶ施設もあるらしい。

処分から焼却までの作業は自動化されており、職員は別室でモニターを見ながら進めていく。処分機の蓋が閉まる。ビューという高音とともに炭酸ガス（二酸化炭素）が3分注入され、保持3分、排出に3分かかるといふ。ほとんどは、約5分で呼吸中枢が麻痺し、自発呼吸が止まり、死に至る。一方、麻袋に入れられた子犬や猫たちは直接縦1m、横0.5m、高さ0.6m程の小型の処分機に入れられ、成犬以上に高濃度の炭酸ガスを注入する。生まれて間もない子犬や子猫は呼吸量が少ないため、それでも絶命するまでの時間は、成犬よりも長いという。全工程にかかる時間は約15分。作業は機械によって自動化されていて、人が関与するのはわずかな部分しかない。

その後、犬猫たちは焼却炉へと移される。約1200度の高温で5時間程、骨がサラサラの砂状になるまで焼かれる。遺骨は、年間約1トンにも及ぶという。その内のほんの少しが慰霊碑に収められる。それ以外は、産業廃棄物として処理される。

同じ命が、一方で歓迎され高額で引き取られ、もう一方で捨てられ処分されている。これは決して非日常ではない。このような事態を引き起こしているのは、紛れもなく私たち普通の人間なのである。

2. 動物管理施設を訪問して

犬猫殺処分数において7年連続の全国ワースト1といわれている福岡県。その福岡県の2ヶ所の動物管理施設を訪問した。

最初に訪れたのは、福岡市東部動物管理センター。ここは、福岡市の最も東の外れ、東部清掃工場と東部污水工場に隣接した丘の上に位置する。約14㎡の敷地内には、2階建ての抑留棟と管理棟、少し離れた所に子犬舎と犬小屋、そして動物慰霊碑がある。

「狂犬病予防法」、「福岡市蓄犬等取締り条例」、「動物の愛護及び管理に関する法律」、「福岡県動物の愛護及び管理に関する条例」を根拠法令とし、犬の登録・狂犬病予防注射、野犬等の捕獲、犬猫の引き取り、飼い主の指導並びに負傷犬・猫の保護収容等を行うとともに、動物愛護週間行事を実施する等、動物愛護・適正飼養啓発事業が主な業務内容である。福岡市保健福祉局衛生部の下部組織にあたり、市の財政予算で運営し、職員数は現在14名となっている。

平成13年度に収容された犬猫の数は、犬が1,244頭（処分数865頭）で、猫が4,257匹（同4,183匹）に上った。

そのうち、飼い主が自ら持ち込んだ数は、犬が474頭、猫が4,131匹となっている。その理由としては、「たくさん産まれたのでこれ以上飼えない」が一番多く、ついで「近所からの苦情」、「転居」等となっている。⁸

施設内で最初に案内された動物慰霊碑。そこは、手入れが行き届いており、つい最近ボランティアの人が手入れに来てくれたという。そこでは、殺処分された犬猫の霊を供養するために、毎年、職員や関係者が集まって慰霊祭が行われている。

次に案内されたのは抑留棟。そこに明日にも処分される運命の動物たちはいた。近づくにつれ異様な気配と鳴き声を感じ取った。そこは、息苦しささえ感じるような雰囲気だ。抑留室には、4つに仕切られた犬たち用の成犬室があった。中には入らず、抑留犬確認窓から覗き込むと、彼らは一斉に吠え始めた。鉄格子とコンクリートで囲まれた部屋に響き渡る鳴き声。そこには、十数頭の犬が収容されていた。各部屋には、収容日とそれぞれの犬の特徴がチョークで明記されている。日にちが経てば経つほど、彼らの死は刻々と近づいていることになる。処分は、一週間に一回のペースで行われているという。処分された動物の死体は、環境局所管の専用炉にて焼却処分されている。

動物収容施設に対する一般のイメージは、処分、つまり生命の暗に対するものが強いと思われがちであるが、センターの業務は決してそれだけではない。

ここでは、一般の動物棟とは別に子犬舎が設けられ、不要犬として持ち込まれた子犬のうち、生後2、3ヶ月くらいで条件に合うものを選び、飼育している。その子犬たちは毎月第2土曜日の譲渡会によって希望する一般家庭にもらわれている。また、平成12年度から譲渡前の子犬や模範犬として飼育されている成犬を、幼稚園等の団体や家族（個人）へ派遣する「ふれあい教室」を実施し、動物と触れ合い、動物との付き合い方や命の大切さを学ぶ機会を設けている。

抑留棟にいた彼らの吸い込まれるような純粋な眼差しを目の前にして言えること。それは、真に責められるべきは、終末処理を行なう行政やそこで働く職員ではない。そこに動物を捨てる人間なのである。

次に訪問したのは、1982年に設立した財団法人福岡県動物管理センター。ここは、福岡県古賀市小竹の緑深い山間に位置している。敷地面積は約12㎡。昭和57年に財団法人として設立され、今年で22年目を迎えた。現在10名の職員が業務に携わっている。

当センターでは、政令指定都市・政令市（福岡市、北九州市、大牟田市）を除く動物関係を所管するために設立さ

れ、飼い主からの直接の引き取りや、県域保健福祉環境事務所 16ヶ所（支所を含む）と大牟田市保健所（猫のみ）からの動物の収集、保管、致死処分を行っている。

取材に行った時には、もう既に収容動物は処分された後であった。ここでは、午前中に処分機を稼働させ、焼却処分するという。見学した際の犬房は、きれいに掃除されていた。鉄格子とコンクリートに囲まれた犬房は、そこに数時間前、生命が存在していたことを物語ってはいなかった。それでも、そこだけ暗くひんやりとした空気が漂っていたのは確かだった。

当センターでの平成 14 年度の動物の収容数は、犬が 7,517 頭、猫が 6,912 匹で、合計 14,429 頭（匹）であった。その内、処分数は、犬が 7,403 頭、猫が 6,897 匹で、合計 14,300 頭（匹）となった。また、譲渡数は、譲渡会に 92 頭、試験・研究用に 33 頭が引き渡された。

当センターでは、特に動物愛護と適正な飼育についての啓発事業に力を注いでいる。小学校への動物愛護教室や犬のしつけ方教室、ペット相談、施設見学、講習会...そして、子犬の譲渡会である。

子犬の譲渡会においては、当センターで引き取った子犬のうち生後 2ヶ月前後で、健康状態が良好で性格が温和なものを選び、健康管理（ワクチン接種、寄生虫検査等）及び基礎的なしつけを約 3 週間行った後、終生愛情と責任を持って飼育できる里親希望者に無償で譲渡を行っているという。そして、平成 14 年度から「子犬の譲渡会」の 1 週間前に開催される「事前講習会」への参加を譲渡の条件とし、飼育の冷静な判断と、責任ある飼い主の養成に努めている。

少し離れたところにある子犬舎に案内された。そこには、一生懸命背伸びをして、遊びたくて仕方ないといったような元気な姿の子犬たちがいた。すっと手を差し出すと、我先にと私の手を舐めていた。

現在は、子犬のみを譲渡対象としているが、これからは成犬や子猫等への譲渡やセラピー犬や介助犬等のスクリーニング（選別）も行っていきたいと職員は語ってくれた。しかしながら、財政難や人材不足のため、かなりの困難を強いられているというのが現状である。また、当センターでは、約 20 名のボランティアを募っており、人材不足を補っている。しかし、ボランティアとしての活動にはある程度の限界があるという。専門性が高く望まれているのである。それでもセンターは、市民が来やすいような、そして活動しやすいような箱作りが大切であると語ってくれた。

3. 人と動物の共生のユニヴァーサル・デザイン

「ユニヴァーサル・デザイン (Universal Design)」という言葉がある。これは、ロン・メイスによって提唱された概念で、「全ての年齢や能力の人々に対し、可能な限り、最大限に使いやすい製品、建物、環境等をデザインすること」と定義付けられている。そして、全ての人間には、それぞれ何らかのハンディを持っていることを視野に入れて、老人から子どもに至るまでできるだけ多くの人々が住みやすい利用可能なデザインの実現を目的としている。

ユニヴァーサル・デザインの考え方では、人間を子ども、老人、健常者、身障者等によって分類することをしない。それぞれの人のニーズに合ったものこそが関心の的であるという。つまり、多様なニーズを持った人々が社会を構成していることが自然であるということを示している。だからこそ、ユニヴァーサル・デザインは、「みんなのためによりデザイン」であるといわれている。

そして、人間がはびこる人間圏という世界の中で、最も身近であり、かつ弱者の立場であるペット動物との共生への道を模索し、創造するということは、つまりは、人間にとっても心地よい、住みやすい都市環境づくりにつながると思う。そこで、本論文では、本来のユニヴァーサル・デザインの定義から、人間だけにとどまらず、もっと広義な意味における動物を含めた「共生のユニヴァーサル・デザイン」とし、人と動物の共生を可能とする社会システム、すなわち都市環境づくりをデザインすることと定義した。

以下に、「共生のユニヴァーサル・デザイン」の考え方を取り入れていると思われる取り組みについて、いくつか事例を挙げた。

(1) 「地域猫」の誕生

横浜市磯子区では、全国に先駆けて「地域猫」という概念をつくりだした。地域猫とは、地域に住み着いて、人から餌をもらって生活している飼い主のいない猫（外猫）を、地域住民が新しい飼い主として適切な飼育をし、管理することによって、飼育の所在が明らかな猫へと移行していき、その結果として外猫の減少を図るというものである。

猫否定派と、猫肯定派が互いに議論を重ねた結果、「家族のひとりとして生活している猫を正しく飼育すると同時に、現在自ら生活している猫も地域という大きな家族のなかで正しく管理をして生活させよう」⁹⁾ という、共生の道を模索するということまで歩み寄った。その結果、野良猫たちに、その上地で生きる許可が与えられたのである。

磯子区の多くの区民が、猫を好きか嫌いかは別として話し合いに参加し、互いに歩み寄り、議論を重ね、人と猫の共生の道を模索している。このような「共に生きる」という取り組みが可能であることが、ここで証明されつつあるのではないだろうか。

(2) 「No Kill City(殺さない街)」～サンフランシスコ～
アメリカ、サンフランシスコにある SPCA (*Society of Prevention for Cruelty to Animals*: 対動物虐待防止協会) では、保護した犬や猫をただの一頭も殺さないという「No Kill City (殺さない街)」をスローガンに掲げている。予算規模は年間約 1,800 万ドル (約 14 億) で、全て寄付、補助金、遺贈によるものであり、税金による助成は一切受けていない。そして、SPCA には、動物を救うためだけでなく、救った動物と人間が快適に共生するまちを支えるためのプログラムと名の付くものが、実に 20 以上もある。

(3) プリズン・ペット・パートナーシップ・プログラム

「プリズン・ペット・パートナーシップ・プログラム (*Prison Pet Partnership Program*)」とは、アメリカのワシントン州、最重警備女子刑務所で、受刑者に職業訓練の選択肢として介助犬の育成を行うプログラムである。このプログラムは、捨てられたり飼い主が何らかの事情で飼えなくなって持ち込んだ犬猫を保護し、里親希望者に譲る施設である。動物シェルターと連携し、介助犬として適切な犬を見つけ出す。そして、受刑者が身寄りのない1頭の犬を預かり、寝食を共にし、身体が不自由な人の着替え等手足の助けになる犬を育てる。

この刑務所では、他にも犬のしつけ教室やトリミング、一時預かるサービス (ペットホテル) を行っており、市民は十分に活用している。そして、受刑者たちが刑期を終えて出所する頃には、犬のトレーナーやトリマーとして自立できるようになっている。出所後の就職率は 100%。また、再犯罪はというと、過去三年間はゼロであるという。

おわりに

「人と動物との共生」というテーマは、人類最大の課題であるといえよう。今あるものをつくりかえ、住みやすい世界を、地球を創造しデザインするということは、「ああすればよい、こうすればよい」といった一筋縄ではいかならう。けれども、共に生きて、お互いがお互いの喜びになる、助け合う、認め合うことは、ごくごく普通のことなのだと思う。人間に本来備わっている感性、感動する心、

共感する心、美しいものを美しいと感じられる心...が、生命を慈しみ、かけがえのないものとして、「共生のユニヴァーサル・デザイン」を創造することにつながっていくのではないだろうか。

本稿を機に、ペット動物を取り巻く社会と人と動物の共生について、少しでも興味を持って頂けたら幸いである。

謝 辞

次の方々にお礼申し上げます。資料提供して下さった札幌市動物管理センターの太田さん、神奈川県動物保護センターの大坂さん。親切な対応で、取材をさせていただいた福岡市東部動物管理センターの森田さん、職員の皆さん。福岡県動物管理センターの黒本さん、網野さん、小山さん、そして職員の皆さん。収容施設内の動物に対する彼らの熱い思いとその行動力は、私にとって心強い存在でした。

そして、親身な指導をして下さった宮崎正勝教官、重松克也教官に心から感謝致します。

[註]

- 1 松村明 編 「大辞林」 三省堂 1988.11 2181 項
- 2 <http://www.jpffma.org>
ペットフード工業会 「第 10 回 (平成 15 年度) 犬猫飼育率全国調査」 2004
- 3 <http://www8.cao.go.jp/survcy/h15/h15-doubutu/>
総理府 (内閣府大臣官房政府広報室) 「動物愛護に関する世論調査」 2003.7
- 4 スタンダード...種ごとに定められた体型、毛色等の標準のこと
- 5 東洋経済新報社 「週刊東洋経済 (5811)」 2003.3
「潜入レポート 1 頭わずか 20 秒で落札ペットオークションの現場」 109 項
- 6 http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/pamf_rep/pet_14_1.html
環境省 「ペット流通販売実態調査 (平成 15 年度)」
- 7 <http://www.alive-net.net/companion-animal/inuneko.html>
地球生物会議 ALIVE 「行政による犬猫の処分とは」
- 8 福岡市東部動物管理センター 「犬 (猫) を持ちこんで来た飼主アンケート調査 (抜粋)」 H12.7~H13.3
- 9 横浜市企画局政策部/横浜市企画局政策部調査課 編 「調査季報 145 号」 2001.3
小林充子 著 「都市生活とペット 地域猫の誕生 磯子区猫の飼育ガイドライン推進協議会の活動」 38 項